

シューベルト作曲「冬の旅」D911における ペータース版とベーレンライター版の比較考察

—中声用を用いた場合—

近野賢一¹・讃岐京子²

1. 研究の動機と目的

シューベルト（1797–1828）が死の前年に作曲した歌曲集「冬の旅」D911はドイツリート史における金字塔とも言える作品であり、これまで多くの演奏家がリサイタルで取り上げ演奏し、また録音を残してきた。原調はテノールか高いバリトンの調で作曲されているものの、低く移調されてバリトン歌手によって演奏される機会が多い。近野もこの歌曲集を公の場でこれまで6度演奏してきたが、原調で全曲を歌う事はできず、これまで全ての演奏機会においてマックス・フリーレンダー編のペータース版中声用を用いてきた。しかし1979年にヴァルター・デュル編のベーレンライター原典版が出版され、特に移調の仕方やテキストの選び方で両者には際立った違いが見られる。

本稿では歌曲集「冬の旅」D911を全曲、バリトンが取り上げる場合のペータース版と現在最新の研究の成果であるベーレンライター版を比較考察することで、シューベルトがどのような演奏を求めているのかを探り、自身の演奏の一助とするとともに学生への楽譜選択の指針としたい。

2. 楽譜について

I. ペータース版

今回使用するのはマックス・フリーレンダーの編纂により『シューベルト歌曲集』として1884年に出版された全7巻のうちの第1巻である。全巻には計434曲が収録されており、第1巻から第3巻にいたっては高声、中声、低声の3種類が出版されている。バリトンのクリスティアン・ゲルハーエルとピアノのゲロルト・フーバーは彼らのCDでこの版を使用するとともにライナーノートで以下のように書いている。「長い間歌手たちによって用いられてきて、誰も無視できない《冬の旅》の楽譜の聖典とすらなっている」³。多くのバリトン歌手はこの中声用を用い、演奏・録音を行ってきた。近野もこれまで「冬の旅」を取り上げた全てのリサイタルでこの版の中声用を使用している。

II. ベーレンライター版

ヴァルター・デュルの編纂により1979年に出版される。詩人別に第1巻から第8巻はシューベルトの生存中に出版された歌曲が収録され、第9から第17巻ではそれ以外の歌曲が収められている。また作品番号はオットー・エーリヒ・ドイチュによるドイチュ番号ではなく、シューベルト自身によるOpus番号に拠っている。本稿では2009年発行の第2版を使用する。

1 岐阜大学教育学部非常勤講師

2 岐阜大学教育学部音楽教育講座

3 クリスティアン・ゲルハーエル ゲロルト・フーバー「冬の旅」CDライナーノート2001年ARTE NOVA

3. 比較考察

(1) 移調の問題

歌曲の演奏において、他の分野と明らかに違い、そしてしばしば議論になるのは移調の問題である。このことについてフリートレンダーは次のように述べている。「理論家たちは、リートは作曲者が定めた調で歌うべきだと言うが、もしそのように限定するならば、実際に歌うにあたっては、困難なことになる。シューベルト自身、彼の歌を移調することを嫌がらなかったのであり、彼が選んだ調には根本的な意味はないということがわかる。[中略] リートを歌うのに、5度も低く移さねばならないような低い声の持ち主は、リートの演奏を諦めるべきだと言わねばなるまい。アルトやバスにとっては、この新しい版によって、演奏会や個人的使用が可能になればよいと思う。2つのミュラー歌曲集の場合は、連続する歌の互いに関連する調を考慮して、低く移調した全ての調に、原調を書き添えておいた。[中略] 移調にあたって問題となるのは、ピアノ伴奏であり、様々な点で、変更を加える必要性が出てくる。編者は、ピアノ・パートを[随時1オクターブ]高く演奏することについては、伴奏者[の判断]に委ねることにした。シューベルト自身、移調にあたって伴奏の変更を認めていた。《水車屋の花》で彼は、片手で演奏できる低い音を書き添えているのである。」⁴

それではシューベルト自身は移調について実際どう考えていたのだろうか。一つの手がかりとしてシューベルト自らが移調した筆写譜を作成したという例がある。「美しい水車屋の娘」の第7曲、第8曲、第9曲を、当時シューベルト歌いとして著名だったバリトンのカール・フォン・シェーンシュタインのために、シューベルトが移調して書いている。第7曲原調のA-durをF-durに、第8曲原調のC-durをA-durに、第9曲原調のA-durをG-durにしているのである。注目すべきはその移調の幅で、第7曲、第8曲は長3度、第9曲は長2度というように、異なる幅で低くしている。ここから推測できる事は、例えばシューベルトの友人や知人たちの集い「シューベルティアーデ」では、職業歌手からディレタントまであらゆる人に演奏され歌われた中で、シューベルト自身も移調して演奏する機会があったのではないかということである。シューベルトの多くの歌曲を歌ったミヒャエル・フォーグルもベートーヴェン『フィデリオ』初演のピッツァロ役や『フィガロの結婚』の伯爵役を歌ったバリトンである。とはいえ、フリートレンダーが書いたように、「彼が選んだ調には根本的な意味はない」とは言えないだろう。バリトンのヘルマン・プライも「冬の旅」の移調について次のように書いている。「しかしたとえば『春の夢』の場合、移調するのは特にいやなかんじだ。オイゼービウス・マンディチェフスキーが校合研究で証明したように、シューベルトはもともとこのリートをト長調で書くつもりだった。ピアノ導入部の数小節が楽譜に書き込まれた時、ト長調を線で消し、その代わりにより明るいイ長調を選んだ。」⁵ この事実からもシューベルトが作品を生み出す際に調性を慎重に選んだということに疑いはない。

また当時、平均律は理論的に知られていたとしても実用化されておらず、現在、一般に古典調律法と呼ばれる調律法が用いられていたとされている。本稿ではその詳しい調律法については触れないが、当時の楽器ではその調律の仕方から調性による響きの違いがより顕著であった。例えばC-durをH-durに半音低く移調したとして、得られる響きは「ただ半音低くなった」という次元のものではなかったのである。

4 村田千尋著 シューベルトのリート 創作と受容の諸相 音楽の友社

5 ヘルマン・プライ著 原田茂生・林捷共訳 喝采の時 メタモル出版

ここでペータース版とベーレンライター版の、ともに中声用がどの調性を選んでいるか表にまとめてみた。

※（大文字は長調dur，小文字は短調mollを表している）

曲名	原調	ペータース	ベーレンライター
1. Gute Nacht	d	c（長2度低い）	c（長2度低い）
2. Die Wetterfahne	a	g（長2度低い）	g（長2度低い）
3. Gefrorne Tränen	f	d（短3度低い）	es（長2度低い）
4. Erstarrung	c	a（短3度低い）	b（長2度低い）
5. Der Lindenbaum	E	E（原調）	D（長2度低い）
6. Wasserflut	e	d（長2度低い）	d（長2度低い）
7. Auf dem Flusse	e	d（長2度低い）	d（長2度低い）
8. Rückblick	g	f（長2度低い）	f（長2度低い）
9. Irrlicht	h	a（長2度低い）	a（長2度低い）
10. Rast	c	h（短2度低い）	b（長2度低い）
11. Frühlingstraum	A	G（長2度低い）	G（長2度低い）
12. Einsamkeit	h	h（原調）	a（長2度低い）
13. Die Post	Es	C（短3度低い）	Des（長2度低い）
14. Der greise Kopf	c	h（短2度低い）	b（長2度低い）
15. Die Krähe	c	h（短2度低い）	b（長2度低い）
16. Letzte Hoffnung	Es	D（短2度低い）	Des（長2度低い）
17. Im Dorfe	D	D（原調）	C（長2度低い）
18. Der stürmische Morgen	d	d（原調）	c（長2度低い）
19. Täuschung	A	A（原調）	G（長2度低い）
20. Der Wegweiser	g	f（長2度低い）	f（長2度低い）
21. Das Wirtshaus	F	F（原調）	Es（長2度低い）
22. Mut	g	fis（短2度低い）	f（長2度低い）
23. Die Nebensonnen	A	G（長2度低い）	G（長2度低い）
24. Der Leiermann	a	g（長2度低い）	g（長2度低い）

ペータース版は原調でもバリトンにとって高すぎない曲については原調を残しているのに対して、ベーレンライター版は24曲全てを一様に長2度低く移調している。

このことについてヴァルター・デュルは1979年出版のベーレンライター版序文において以下のように記している。「中声用に移調した歌曲の場合、調性格をできる限り元のままに保つべきである。この時、シャープのついた調性からフラットのついた調性への移調、またはその逆は原則として避ける。こうするとほとんどの場合、長2度、または短3度低く移調することになる。まとまった組歌曲やチクルスでは、曲と曲との調性間隔は元のままに保たれている。つまり、個々の歌曲には、—これは元の高さでも同じことなのだが—これまで流布していたやり方の場合より不都合な音高が生じて、一つのチクルスの歌曲は、たとえば、すべて一様に長2度移調されるということである」。⁶

6 原典版シューベルト歌曲集2 冬の旅 ヴァルター・デュル編 竹内ふみ子 前田昭雄 訳

(2) 音域とバリトンにおける歌唱について

それではここで両版において移調の幅が異なった14曲の音域と歌唱の難しさについて試みる。以下便宜上ペータース版をPts, ベーレンライター版をBrtと略記する。

—第3曲—

Ptsでは48小節目に出るE音が最高音, BrtではF音で1回だけである。低音域は20小節からPtsではA音3回B音5回, BrtではB音3回Ces音が5回出てくる。

—第4曲—

Brtではバリトンにとっての高音域であるGes音が4回出てくる。Ptsでの最高音はFである。しかしこの曲の場合の最高音は, 早いテンポ「Ziemlich schnell」(かなり速く)における, 3~4小節(ブレスをどこで取るかによる)に渡る長いフレーズの中の1音であり, 演奏上それほど苦しくはない。

—第5曲—

原調をとるPtsの最高音はE音で4回, Brtでは長2度低いのでD音が4回。この曲では51小節目からピアノの細かい動きとともに出てくる低音域で, PtsではC音が6回の後, H音が1回, BrtではB音が6回の後A音が1回。この低音域はピアノパートが歌を覆い隠してしまわないように注意しながら演奏せねばならない。

—第10曲—

Ptsでは30小節目, 60小節目にD音から10度上に跳躍して出てくる最高音Fisが計2回, BrtではそれがDes音からF音への跳躍である。この最高音は, 特にその部分だけでなく曲全体を通して最低音(PtsではH音, BrtではB音)が, それぞれ計14回散りばめられているため, 非常に難しい。基本のポジションをどの音域に保ち, 低音域, 高音域を歌唱するかが重要となる。

—第12曲—

45小節目, 歌の最後のフレーズに最高音が1回だけ出てくる。PtsではFis音, BrtではE音である。第10曲と同じように低音から中・高音域まで音が散りばめられているが, 最後の最高音は特に子音を持たないeで始まる, elendと言う言葉の語頭に当てられており緊張を強いられる。ダイナミクスは小節頭のfpから次の小節のppの間だが, テキストは最後の歌詞「nicht」で打ち消す前の「こんなに惨め, 惨めではなかった」にあたる部分で, 緊張感が完全に弛緩する直前, アクセント的に扱うものと考えられる。柔らかくというより緊張が必要なので非常に難しい箇所であるが, BrtのE音であれば苦はない。

—第13曲—

45小節と90小節に最高音(PtsではF音, BrtではGes音)が現れる。それぞれ前の小節(44小節, 89小節)のダイナミクスfから次の小節(46小節, 91小節)のpまでdecrescendoしながら出てくる最高音で, フレーズの横の流れの中で出てくるものであり, 第4曲の最高音と同じくそれほど困難なものではない。

—第14曲—

最高音はPtsでE音, BrtでEs音が3回出てくる。一フレーズが11度の幅を持っており, 最高音はさほど高くないものの, 特に7小節の「ü」, 38小節の「die-ser」にあたる音は特に難しさを感じる。一フレーズ中, 高音域にばかり焦点を当てて基準のポイントを設定していると, フレーズ頭とフレーズ最後の低音域が鳴らなくなるので注意が必要である。

—第15曲—

31小節目にPtsではFis音, BrtではF音が最高音として1回だけ出てくる。29小節以降のフレーズで最低音(PtsではH音, BrtではB音)が12回出てくる。

—第16曲—

PtsではFis音が, BrtではF音が最高音として1回だけ39小節目に出てくる。PtsにおけるFis音の場合でも前のA音からの6度の跳躍でさほど難しくはない。29小節目に現れる最低音はテンポの変わり目「etwas langsamer」(いくぶん遅くなって)であり, BrtにおけるAs音はバリトンにとってかなり低い音でもあるので, 「fällt」の子音fを十分な時間をかけて発音することによりピアノとのアンサンブルに注意したい。

—第17曲—

原調のPtsでは最低音D～最高音E, Brtでは最低音C～最高音Dの音域であり, どちらもバリトンの声域には全く無理のない音域である。

—第18曲—

前曲と同じく原調のPtsでは最低音Cis～最高音Es, Brtでは最低音H～最高音Desの音域で, 「Ziemlich geschwind, doch kräftig」(かなり速く, しかし力強く)という表情指示からすると, Brtでは特に歌いだしの低音域に注意しなければならない。言葉をはっきりと発音し, リズムが滑らないようにエッチをきかせて歌唱しなければ緊張感が薄くなってしまう。一方原調のPtsはその点において歌唱しやすい。

—第19曲—

同じく原調のPtsは最低音Dis～最高音E, Brtは最低音Cis～最高音D。音域だけを見る場合どちらもバリトンにとってストレスのない音域だが, Ptsの19小節目, 39小節目に6度下の前打音を伴う最高音Eは非常に難しい。「Etwas geschwind」(いくぶん速く)の速度表示と, 幻におけるウィーン風の庶民的舞曲リズムの横の流れの中での跳躍である。前打音を少しだけ長めに取る事は助けになるが, 重く取りすぎてしまうと最高音への跳躍が困難になる。BrtでのD音は楽である。

—第21曲—

原調のPtsでは20小節と27小節に最高音Fが出てくるが, 特に20小節のFは「matt」(疲れはてた)という言葉に当てられており, 叫んで力で出すような歌唱は絶対にすべきでない。頭声を多く含んだ

押さない歌い方が求められており非常に難しい。逆にBrtでの該当箇所はEsでバリトンにとって快適すぎると言えなくもない。

—第22曲—

Ptsでは57小節に出てくるFis音が最高音であり、BrtではF音である。「Ziemlich geschwind, und kräftig」(かなり速く、しかし力強く)の速度指示では当てられた16分音符の時間は短く、チャンスは少ないゆえ、シューベルトは特に指示を与えていないものの多少テヌートをかけてどっしりと歌うことが多い。テキストも繰り返されて2度目であり、この方がより自然と言える。とはいえまだ短いといえるこの16分音符でFis音をしっかりと鳴らすのは非常に難しい。半音の違いながら、BrtのF音はバリトンにとってより快適である。またBrtにおける最低音はAsになるが、こちらは語尾(Göter)に当てられており、重みを与えるのは不適切なので低さに問題は感じない。

以上のようにそれぞれの版が選んでいる調性をみると、Ptsではバリトンでも音域的に原調で問題のないものはそのまま残し、そうでないものに関しては移調している。この時Brtのように、フラット系はフラット系に、シャープ系はシャープ系に移調するということにはこだわっていない。むしろ実用性を重視しているといえる。一方のBrtはすべてを原調の長2度下に移調しており、それによって高すぎる音、低すぎる音は生まれるものの、Pts版における最高音、最低音から逸脱するほどのものでもなく、Ptsの調に慣れ親しんだバリトンが歌唱するときにも無理を感じない。

(3) アクセントとデクレッシェンド

シューベルトの筆跡ではアクセントの記号が大きく書かれ、彼の意に反してアクセントがデクレッシェンドと印刷されてきた。Brtではそれをアクセントになおしている。

ピアノパートにおいてその修正箇所の多さは顕著である。特にそのアクセントの前がクレッシェンドの場合において著しい。

Brtでピアノパートにおいて、Ptsにおけるデクレッシェンドをアクセントに修正したのは以下の通りである。

第2曲 1 (譜例1), 2, 3, 8, 10, 23, 27, 34小節

第4曲 24, 32, 33, 34, 42, 43, 58, 63, 79, 81, 84, 93, 95小節

第5曲 7, 18, 39, 43, 69, 74, 75小節

第7曲 53小節

第8曲 2, 4, 13, 16, 23, 26, 48, 51, 54, 小節

第9曲 33, 37, 41小節

第10曲 25, 55小節

第11曲 16, 18, 20, 22, 24, 41, 60, 62, 64, 66, 68, 85小節

第12曲 33, 45小節

第13曲 34, 79小節

第14曲 3, 9, 22, 34, 43小節

- 第15曲 32小節
- 第16曲 40, 45, 46小節
- 第17曲 38, 43小節
- 第19曲 29, 37, 40小節
- 第20曲 10, 45小節
- 第21曲 16, 20小節
- 第23曲 2, 6, 9, 12, 14, 17, 21, 27, 30小節

< 譜例 1 - Pts >



< 譜例 1 - Brt >



歌のパートでは以下の2曲でデクレッシェンドからアクセントへの修正がある。

- 第6曲 12 (譜例2), 40小節
- 第8曲 13小節

< 譜例 2 - Pts >



< 譜例 2 - Brt >



(4) ミュラーの原詩とシューベルトの詩

シューベルトの「冬の旅」はヴィルヘルム・ミュラーの「旅するホルン奏者の遺稿詩集第2巻」からテキストがとられているが、シューベルト自身に変更して作曲した部分がある。以下に示す。

	ミュラーの原詩	シューベルトの変更
タイトル	Die Winterreise	Winterreise
第1曲	タイトル Gute Nacht! Ich hab an dich gedacht.	Gute Nacht An dich hab ich gedacht.
第2曲	Er hätt' es ehr bemerken sollen	Er hätt es eher bemerken sollen
第3曲	タイトル Gefrorene Tränen	Gefrorne Tränen
第4曲	Mein Herz ist wie erfroren Fließt auch das Bild dahin.	Mein Herz ist wie erstorben Fließt auch ihr Bild dahin.
第6曲	Wann die Gräser sprossen wollen, Sag mir, wohin geht dein Lauf?	Wenn die Gräser sprossen wollen, Sag, wohin doch geht dein Lauf?
第9曲	タイトル Das Irrlicht Unsre Freuden, unsre Wehen, Jedes Leiden auch ein Grab.	Irrlicht Unsre Freuden, unsre Leiden, Jedes Leiden auch sein Grab.
第14曲	Da meint' ich schon ein Greis zu sein	Da glaubt' ich schon ein Greis zu sein
第16曲	Hier und da ist an den Bäumen Noch ein buntes Blatt zu sehn,	Hie und da ist an den Bäumen Manches bunte Blatt zu sehn,
第17曲	Die Menschen schnarchen in ihren Betten	Es schlafen die Menschen in Ihren Betten
第20曲	Wo die andren Wandrer gehen, Weiser stehen auf die Straßen,	Wo die andern Wandrer gehn, Weiser stehen auf den Wegen,
第21曲	Und tödlich schwer verletzt.	Bin tödlich schwer verletzt.
第22曲	タイトル Mut!	Mut
第23曲	Als könnten sie nicht weg von mir. Schaut andren doch ins Angesicht! ※Ja, neulich hatt' ich auch wohl drei:	Als wollten sie nicht weg von mir. Schaut andern doch ins Angesicht! ※Ach, neulich hatt' ich auch wohl drei:
第24曲	Schwankt er hin und her; Und die Hunde brummen	Wankt er hin und her, Und die Hunde knurren

第4曲の原詩「Mein Herz ist wie erfroren」は「Mein Herz ist wie erstorben」(82~83小節)に変えられている。PtsもBrтもシューベルトのテキスト、すなわち「erstorben」をとっている。この点においては52~53小節と56~57小節においてすでに「Die Blumen sind erstorben」というテキストがあるため、速筆であったシューベルトの間違いではないかという議論があった。またかなりの数の録音でもミュラーの原詩に直して歌われているものが多いが、1827年2月の自筆譜を見ると、「erfrozen」と一度書かれ、その上から濃いインクで「erstorben」と書き直されている。Ptsでは触

れられていないが、Brtでは註において原詩が「erfroren」であったことを明示している。さらにシューベルトのテキストの積極的かつ慎重な扱い方に関して以下のような例がある。「冬の旅」と同じくミュラー詩の「美しい水車屋の娘」において、プロローグとエピローグを含めて5編を除いて作曲し、物語の展開を引き締め、この連作歌曲集を、より真摯で主観的な主人公の若者の物語に仕上げている。このことからシューベルトが原詩に細かく手を入れ、旋律によってテキストの繰り返しや並べ替えを行うことに意欲的だったと推測できる。

PtsとBrtにおいて原詩テキストとシューベルトの変更テキストにおける相違で、挙げられるのは第23曲19小節の「Ja, neulich hatt' ich auch wohl drei:」と「Ach, neulich hatt' ich auch wohl drei:」(前頁表※)だけである。Ptsでは原詩の「Ja」をとり、Brtではシューベルトの「Ach」をとっている。たった一言だが「冬の旅」も大詰めの箇所での一言であり、印象は全然違ってくる。自筆譜を見ると、シューベルトは完全に「Ach」と書いており、Ptsがミュラーの原詩を、Brtがシューベルトの変更をとったことがわかる。

4. 結論

これまで「冬の旅」中声用におけるペータース版とベーレンライター版の違いについてみてきたが、特に大きく異なるのはその移調の仕方であった。これまで多くの名バリトン歌手がこのフリーレンダー編のペータース版中声用を用い、録音を残してきた。筆者自身もこの楽譜を用いて「冬の旅」を演奏してきたことはすでに述べた。それはこういったバリトンの名歌手による録音やリサイタルで、この版が選ばれてきたからである。移調は歌手にとってよりもむしろピアニストにとって苦勞の多いものである。ペータース版に慣れ親しみ本番を重ねてきたピアニストとの相談でペータースを選ぶケースも多かった。しかしバリトンで演奏可能な曲においては原調が保たれているということが、作曲者に対する敬意であるように思っていた筆者も、考えを異にしはじめている。歌える曲は原調、困難なものは低く移調して演奏した場合、曲と曲との調性の移行、その緊密な関係性は奪われてしまう。移調を余儀なくされるバリトンにとってベーレンライター版の全曲を一様に同じ幅で低く移調するという方法は、よりよい方法に思える。特にこちらをとってもペータース版と比較してバリトンにとって演奏不可能な音は見出せなかっただけでなく、ペータース版に慣れ親しみ演奏できる歌手なら、より無理なく演奏できる可能性を見出した。

シューベルトの時代には、全24曲およそ70分から75分を演奏に要するこの歌曲集が全曲を通して演奏される機会は稀だったのではないだろうか。シューベルトの死から28年後の1856年、ユリウス・シュトゥックハウゼンのウィーンでの「美しい水車屋の娘」全曲リサイタルについて、エドワード・ハンスリックは「我々の知る限りこのアイディアは新しい。[中略]これまでバラバラな叙情歌でしかなかったものをドラマとして解釈できるという、重要な利点を得た。」と書いている。⁷ またその4年後、同じ歌手が同じプログラムを歌った際、ハンスリックは前言を撤回し、「何回も繰り返すのは賢明ではない。新鮮な魅力が失われてしまうと、このような叙情超大作の欠点が明確になってしまう。よき粉屋の若者の恋愛を、20段階にわたってずっとともに経験するのは、あまりにも骨が折れると言うものだ」と書いている。⁸ 現代では「冬の旅」でも他の歌曲集でも、まとめて演奏されるのが当たり前と

7 ヘルムート・ドイチュ著 鮫島有美子訳 伴奏の芸術 ムジカノーヴァ叢書

8 ヘルムート・ドイチュ著 鮫島有美子訳 伴奏の芸術 ムジカノーヴァ叢書

なっている。フリーレンダー編のペータース版が1884年に出版されたことを考えれば、ツィクルスとして通して演奏されるよりも、各曲が抜粋され、その時に歌いやすいことを優先に移調されてまとめられたと考えることもできる。しかし全曲が通して演奏されるのが当たり前となっている今日、ベーレンライター版における移調の仕方は、より望ましいとの結論に至った。

また慎重な検証の結果によるベーレンライター版のデクレシェンドからアクセントへの修正は、シューベルトの時代のピアノの性質や性能を考慮すればやはり正しいといえる。進化を遂げたモダンピアノを用いたとしてもこの修正は、シューベルトの歌曲演奏にふさわしい響きをもたらす助けとなるだろう。

本稿で述べてきた事はシューベルトの音楽やミュラーの詩の、解釈や演奏法には触れておらず、それ以前の楽譜の考察である。この作品を演奏する際移調を余儀なくされるバリトンにとってベーレンライター版が大きな助けとなる事は明らかであり、リサイタルや録音でこの版が用いられることも多くなるだろう。シューベルトが死の前日にもなお校正を続けた「冬の旅」という偉大な連作歌曲集の深淵な世界に、偉大な歌手による規範や慣習に流されずに、筆者を含めた現代の演奏家が勇気を持って入り込んでいくことが重要であると考えられる。

使用楽譜

- EDITION PETERS SCHUBERT LIEDER I Mittlere Stimme
編著者 Max Friedlender
- BÄRENREITER URTEXT SCHUBERT Winterreise op.89 Mittlere Stimme
編著者 Walter Dürr 2.Auflage 2011
- 全音楽譜出版社 ベーレンライター原典版 シューベルト歌曲集2 冬の旅作品89 中声用
編著者 ヴァルター・デュル 竹内ふみ子 前田昭雄 訳

参考文献

- 村田千尋著 シューベルトのリート 創作と受容の諸相 音楽の友社
- ヘルマン・プライ著 原田茂生・林捷共訳 喝采の時 メタモル出版
- ヘルムート・ドイチュ著 鮫島有美子訳 伴奏の芸術 ムジカノーヴァ叢書
- ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ著 原田茂生訳 シューベルトの歌曲をたどって
- 南弘明 南道子著 シューベルト作曲 歌曲集 冬の旅 対訳と分析 国書刊行会
- エルンスト・ヒルマー著 山地良造訳 大作曲家シューベルト 音楽の友社
- オッター・エーリヒ・ドイチュ「ドキュメント シューベルトの生涯」より 實吉春夫 訳・解説 シューベルトの手紙 メタモル出版
- 梅津時比古著 冬の旅 24の象徴の森へ 東京書籍